



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

第58回日本手外科学会 学術集会の開催にあたり

目次

- 学術集会開催にあたって
- JSSH-ASSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション9) 「モナ・リザの手 -The Hand of the Mona Lisa-」
- 委員会報告
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第58回日本手外科学会学術集会

会長 根本 孝一

(防衛医科大学校整形外科学講座)

第58回日本手外科学会学術集会を平成27年(2015年)4月16日(木)・17日(金)の2日間、京王プラザホテル(東京都新宿区)で開催させて頂きます。防衛医科大学校整形外科学講座で担当させて頂くことを大変光栄に存じます。防衛医科大学校整形外科手外科班と慶應義塾大学医学部整形外科上肢班で合同準備委員会を設置して鋭意準備を進めて参りました。

学術集会のテーマは「守・破・離」としました。これは本来、武道や芸道を習得する過程を表現したのですが、手外科にも当てはまる言葉です。すなわち、過去の先達に学び、現在の工夫を行い、未来を切り開くという意味であります。手外科における過去の経験と現在の最新知見を俯瞰して、さらに新たな発展につなげる一助にしたいと思います。

特別講演は、慶應義塾大学名誉教授 矢部 裕先生に「手外科のときめき 一日手会の過去・現在・将来について」、防衛医科大学校名誉教授・(公財)医療機器センター理事長 菊地 眞先生に「わが国における医療機器研究・開発の現状と将来」の講演をして頂きます。教育研修講演は、慶友整形外科病院長 伊藤 恵康先生に「最も悲惨な野球肘 -離断性骨軟骨炎」、京都大学医療短大名誉教授 上羽 康夫先生に「キーンバック病の成因と治療」の講演をして頂きます。また、防衛衛生セミナーとして、防衛省陸上幕僚監部衛生部企画室長 川口 雅久1等陸佐による「自衛隊による国際貢献活動と災害派遣」の講演を行います。

招待講演は、英国からIan Winspur先生とHiroshi Nishikawa(西川 洋)先生、スウェーデンからMikael Wiberg先生、スイスからJörg Grünert先生、米国からWilliam H. Seitz, Jr.先生、台湾から

David Chwei-Chin Chuang先生、シンガポールからAymeric Lim先生をお招きし、それぞれ得意とされる分野の講演をして頂きます。

シンポジウムは、「末梢神経障害」・「末梢神経関連性疼痛」・「肘部管症候群の病態と治療」・「腱損傷」・「TFCCの診断と治療」・「リウマチ手治療の進歩」・「手の感染症の診断と治療」・「音楽家の手の障害」・「Dupuytren拘縮の治療」・「上肢先天異常」の10テーマを企画しました。パネル・ディスカッションは「橈骨遠位端骨折1、2」・「PIP関節脱臼骨折の治療」・「Kienböck病の治療」・「手外科における穿通枝皮弁の展望」・「手・肘の疫学」・「手外科の教育」の7テーマを企画しました。ランチョン・セミナーは11題を企画しました。依頼演題は35題、応募演題は629題を頂きました。応募演題は査読委員による厳正な審査により562題を採用させて頂きました(採択率89.3%)。

研修中の先生からベテランの先生まで、学会に参加された全ての方々に満足して頂けるよう企画しています。会場は交通至便の場所にあります。是非、多くの会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。



JSSH-ASSH Traveling Fellow報告



徳島県立中央病院 整形外科 浜田佳孝

2014年9月1日から10月2日までの1ヵ月間、2014年度JSSH-ASSH Traveling Fellowとして、京都大学整形の池口先生と共に、原則1施設2日間の日程で米国の手外科に関する主要な施設を訪問させて頂く機会を得ました。今回、ASSHの学術集会の前に、メイヨ・クリニック、ワシントン大学セントルイス、ミシガン大学、Massachusetts General Hospital (MGH) を見学致しました。そこで前半の4施設および学術集会に関しては私が、後半の施設に関しては池口先生が報告致します。

今回の目的として、1. 友好関係を作りに行く事 2. 違いを見つけ、見習える点・課題を持つこと 3. 学術集会でも同様に違いを見つけ、見習える点・課題を持つことを心がけて見学してまいりました。訪問先では、いずれの先生からも親切にいただき、米国の手外科についてお話する時間も持てました。

●**メイヨ・クリニック** 非常に臨床に近いところで研究の計画が生まれ臨床でも、世界をリードしていく自負をもって研究と臨床に望んでいる姿勢を肌で感じることができました。マイクロラボではスーパーマイクロコースもできたそうです。研究室では、手作りの装置もあり臨床の視点から研究されている様子に感心しました。過去の留学生の数多い写真の中に、多くの日本人留学生も散見されました。

●**ワシントン大学セントルイス** ガーバマン主任教授が退任された直後の訪問となりましたが、初日の早朝に講義をされており、その場に臨席させていただきました。数年前にネクタイをプレゼントしたことを覚えてくださっておりネクタイを贈っていただきました。巨大なスクリーンでのビデオ会議システムが導入され、数カ所の違った建物で聞いているフェローに質問したりしながらカンファレンスや講義が行われていました。フェローと指導医がマンツーマンで、手術や外来の業務にあつたっており、米国らしい伝統の教育システムが徹底されておりました。

●**ミシガン大学** ケビンチャン先生は、日本からきたフェローに真剣に厳しく対応してくれたことが心に残りました。臨床の課題をどのような形でリサーチし、論文にするか、グラントをとるか等、これらを常に考えられていることを実感しました。

●**MGH** 伝統を重んじ誇りをもって臨床にのぞむ姿勢を感じました。デイビット・リング先生は、私の肘についての質問に対し真摯に答えていただきました。またオランダの大学病院整形外科医師との夕食・交流会にも招いていただき、韓国のフェローや多くの先生方と交流を持つことができました。ジュピター先生も郊外の関連施設で黙々と手術をこなし、その後笑顔でジョギングに出かけていく姿が印象的でした。

●ASSHの学術集会 学会ではペーパーレスで各自の端末が用いられており、資料はPDFでダウンロード、また発表時には投票などにより聴衆が議論に参加でき、今後の学会の方向性を感じました。研修医の教育システム、同種組織の製品化、神経交差縫合術の応用・進歩などが、以前より米国にリードされていますが、アフガン紛争などへの出兵で手足を失った兵士も背景にあるようですが、ロボット義手の格差が一段と大きくなったなという印象でした。

せっかくいただいたチャンスでしたので 今回築いた交友関係をたやさぬよう、また診療のレベルアップ、病院のスタッフや後輩の育成に少しでも貢献できるよう微力ながら精進したいと思います。また、日本手外科学会、米国手外科学会の担当諸先生方、ご推薦いただいた先生、留守中もご支援いただいた諸先生、スタッフの皆様がこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。



Bunnel luncheonでは、各国からのフェローが各自、症例報告+自己紹介しました。
各国Traveling fellowの韓国 英国 シンガポール ブラジル トルコ スロベキアの先生と名刺交換できました。



韓国のフェローとMGHのオペ室で。



今回の学会招待国ブラジルの先生方と遅くまで飲み歩きました。



JSSH-ASSH Traveling Fellow報告



京都大学整形外科 池口良輔

2014年度JSSH-ASSH Traveling Fellowとして、徳島県立中央病院整形外科の浜田佳孝先生とともに米国手外科施設を訪問する機会を頂きました。ボストンでのASSH Meetingとそれまでの前半は浜田先生が報告されましたので、それ以降の後半は私が報告いたします。

Roosevelt病院 (ニューヨーク)

出資者の名前がついたThe C.V. Starr Hand Surgery Centerというアメリカ最古の手外科研修のプログラムをもつ病院で、Eaton先生、Littler先生から引き継がれ現在はGlickel先生がチーフをされており、2週間に一度の屍体を使った上肢の解剖講義など研修プログラムが非常にしっかりしている印象を受けました。アメリカ最古のhand fellowshipというだけあり、廊下にはここで研修を受け現在活躍されている高名な手外科医の名前がたくさん刻まれており、またLittler先生直筆のCM関節や虫様筋の芸術的なスケッチが飾られており、伝統を感じることができました。

San Francisco Surgery Center (サンフランシスコ)

ここはUCSFの名誉教授であるDiao先生が出資者の一人となり中心街のビルの一角でされているプライベートクリニックです。外来見学の機会を与えられ、Diao先生の手術の見学の機会はありませんでしたが、我々の講演が外傷やマイクロサージャリーについてのことであったため、急遽Bunckeクリニックの見学を手配してくれて同施設の訪問もすることができました。Bunckeクリニックはマイクロサージャリーでは日本でも大変有名で、ここでは3時間の遊離外側上腕皮弁を見学させていただき、驚きと故Buncke先生の教えを受け継ぐ流れを感じずにはいられませんでした。

Ochsner Medical Center (ニューオーリンズ)

Duncan先生の外来と手術の見学をさせてもらい、特に手術では日本ではあまり見ることのないリバースショルダーの手術を手際よくされていました。Duncan先生は、まず保存的治療を行い、それでも症状が改善しない症例に対して手術療法をすすめるというように、模範とすべき丁寧な治療をされている印象を受けました。また、初日の早朝の講演後に、最終日に講演するよう指示され、少し困惑しましたが、2つの講演の機会を頂き、貴重な体験をすることができました。

University of Washington Medical Center (シアトル)

形成外科のHuang先生の手術を見学しました。Huang先生は手術室での人望も厚く、手術室を2

部屋使いながら手の手術を朝から約10例、精力的に行われ、hand fellowが血管柄付骨移植の血管茎を切ってしまったり、アプローチで全く違う部位を展開したりしていても、冷静にリカバリーされており、その姿勢を見て納得させられました。こちらの施設では整形外科と形成外科がうまく力を合わせて運営されていることがアメリカ国内でも有名で、Vedder教授曰くmutual respectが大切とのこと、今後の日本国内での手外科のあり方の参考になると思いました。

JSSH-ASSH Traveling Fellowということで、訪問する先々でrespectして頂き、非常に有意義な時間を過ごすことができました。これもひとえに日本手外科学会の会員の皆様のお陰であります。今後は、今回の訪問で築いた友好関係を大切に、日本手外科学会の発展のために微力ながら貢献したいと思っております。最後に、このような機会を頂き、選んで頂いた日本手外科学会理事の先生方、国際委員の先生方、会員の皆様、また推薦して頂いた近畿大学整形外科柿木良介教授、京都大学整形外科松田秀一教授、留守中にご迷惑をおかけした教室の先生方に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



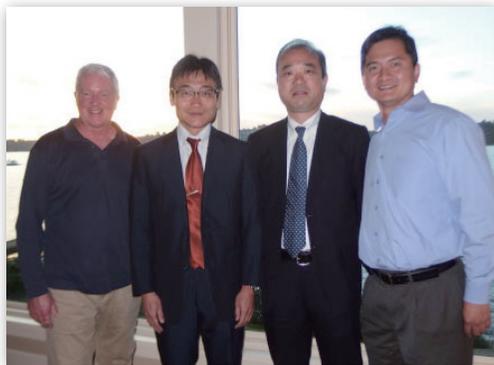
Glickel先生との夕食会



Diao先生とクリニックにて



Duncan先生とオフィスにて



Vedder先生(左端)とHuang先生(右端)と
Vedder先生の自宅にて

手は語る ハンドギャラリー（生田コレクション9）

モナ・リザの手

— The Hand of the Mona Lisa —

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

世界でもっとも有名な絵画の2点は「モナ・リザ」と「葛飾北斎の富嶽36景、神奈川沖浪裏」であると云われていますが、今回の主題はその「モナ・リザ」の手だけを鉛筆（2H、B、4B）で描いてみました（文末に掲載）。モナ・リザの作者レオナルドの生まれた場所は、フィレンツェ近くのトスカーナ州ヴィンチの郊外にあるアンキアーノ村で、1452年4月15日に誕生。父親は地元の名家出身のセル・ピエロ・アントニオ・ダ・ヴィンチ、母親は農民の娘カテリーナで、私生児であった。現在の呼称であるレオナルド・ダ・ヴィンチは「ヴィンチ村のレオナルド」という意味であり、本来の生誕地である村とは異なった村の名称がついているのは、父親が住んでいた村の名前に依るものであると私は解釈している。

手術用のロボットを「ダヴィンチ」と呼ぶのは「ヴィンチ村の」と呼んでいるだけで、いわば「広島村の」とか「東京町の」と呼んでいるようなもので、私にはピンと来ない。付けるとすれば「レオナルド」でしょう、と思う。

それはともかく、レオナルドは1519年5月2日に、フランス国王フランソワ1世の庇護のもと、アンボワーズ城に近いクルーの領主邸宅で67年の生涯を終えるが、手元に残った3枚の絵、「聖アンナと聖母子」、「洗礼者聖ヨハネ」、そしてその10年ほど前にフィレンツェで描いて片時も手放さなかった「モナ・リザ」の3点が遺品の一部として残り、「モナ・リザ」はフランソワ1世に引き取られた。

さて、ここでもう一人のレオナルドに登場していただく。名はレオナルド・フィボナッチ。ダ・ビンチの生きた3世紀ほど前の数学者で、「算盤の書」（1202）によってヨーロッパに数字の0記号を含む十進法を導入したことで有名であるが、今回はその事実よりも、いわゆるフィボナッチ数列（1、2、3、5、8、13、…、前の2項目を加えたものが次の数値となる）である。この数列では、次項の前項に対する比率、すなわち $2/1$ 、 $3/2$ 、 $5/3$ 、 $8/5$ 、 $13/8$ 、…は最初の2.0、1.5、と次第に限りなく $1.618034\dots$ すなわち無理数である ϕ （ファイ）に近づく。この $\phi:1$ が黄金比、神聖比率であり、レオナルド・ダ・ビンチが生涯で唯一かかわった書籍「神聖比率論」

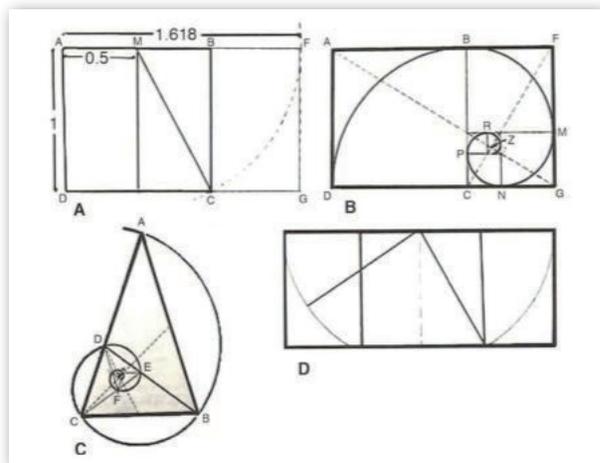


図1

(1509)の理論背景である。図1Aは黄金長方形の作成方法を示す。すなわち、まず正方形ABCDに垂直二等分線を引き、その対角線MCを半径とする弧CFを描く。この弧とABの延長線との交点Fを1点とする長方形AFGDが黄金長方形である。検証はピタゴラスの定理からMCが1.118034となることを計算すれば証明される。1Bは、この黄金長方形から正方形ABCDを切り取ると残りが黄金長方形となり、これが無限に続く。さらに、この正方形の対角を結ぶ円を連続した線とみなすとこれが対数螺旋となる。1Cは対数螺旋と黄金三角形(72-36-72の角度からなるに二等辺三角形)、1Dは二重黄金長方形を示す。これらの法則が自然界で観察され、当然自然の一部である生物、人の体もこの法則に則っているという理論である。図2は、上からA:牛の胚(レオナルド・ダ・ヴィンチ作)、B:オウムガイ、C:ハリケーン・アンドリュウ(1992)でいずれも対数螺旋。図3は、ヴィルヘルム・レントゲンのX線写真(1896)に、同時代の発明家(コロンビア大学教授)のマイケル・プーピンが記入した文字情報である。母指に関しては $\{(A' B') + (B' C')\} / (A' B') = (A' B') / (B' C') = \{(B' C') + (C' D')\} / B' C' = \phi = 1.618$ となり、示指についても、この数式のダッシュを取った同じ式になる事を説明し、フィボナッチー数列の法則が当てはまることを述べている。また、美しい建造物として有名なノートルダム寺院もクアラルンプールのペトロナスタワーも、建築時代が900年も差があるにもかかわらず、どちらも黄金比が繰り返し使われている。

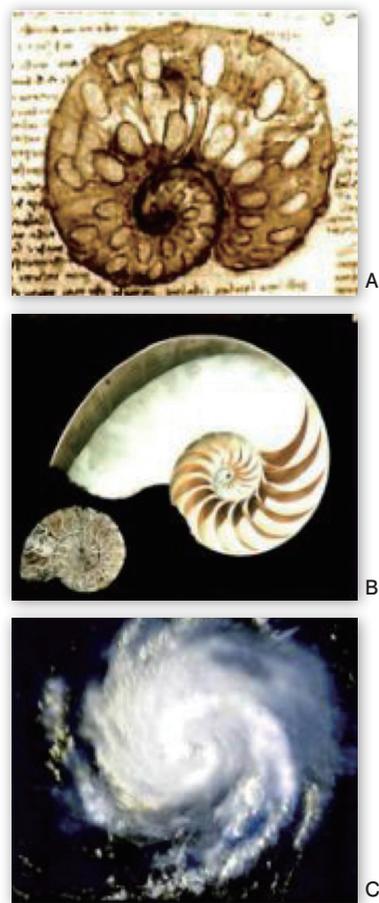


図2

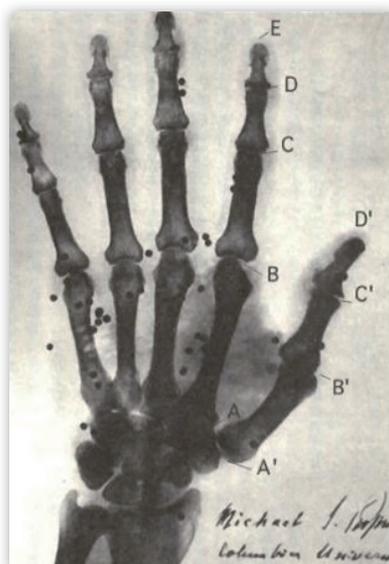


図3

最後に、図4はレオナルド・ダ・ヴィンチの3枚の有名な女性の肖像であり、「ジェネブラ・デ・ベンチの肖像画」、「白貂を抱く貴婦人」、「モナ・リザ」の全ての画像において頭部の頂点から胸元の襟（胴着の上端）までが黄金長方形に収まる構図となっており、この黄金長方形の上辺を基準に正方形をつくると頭部・顔面の長さに一致する。また、彼女の顔そのものが黄金長方形であるとの説もある。さらに、「モナ・リザ」では彼女全体が黄金三角形(72° -36° -72°)によって構成されており、しかも黄金長方形の中心線はどちらかの眼、あるいは眼の近くを通る構図となっている。

以上のような観点から改めてモナ・リザの手を眺めてみると、画面全体における手の位置、体全体の比率を支配する黄金比率、各指節骨の長さを支配しているフィボナッチー数列などが計算され尽くされた結果の画像表現であることが偲ばれる。

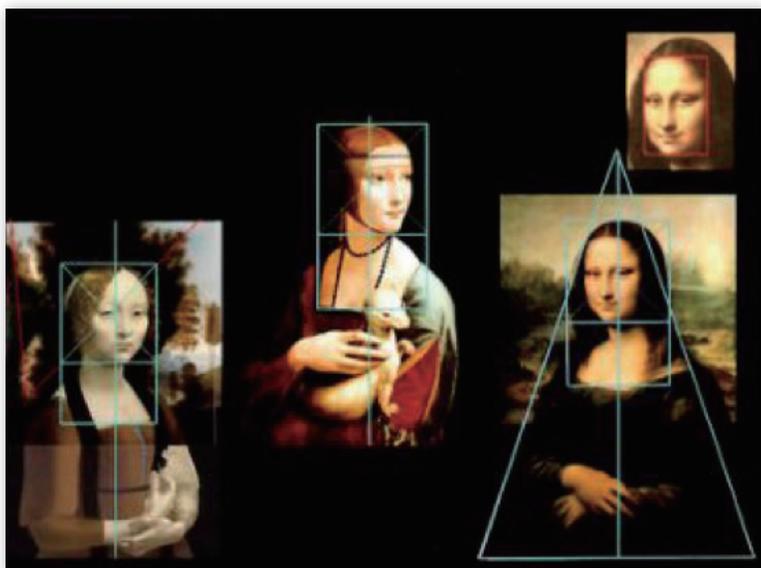


図4



委員会報告

財務委員会

委員長 大江隆史

平成26年4月からの新理事会発足後に選任された新委員からなる財務委員会が平成26年7月22日に開催されました。その場で新委員長に選任された、大江隆史です。財務委員会の概要とその後2回開催された財務委員会についてご報告します。

当委員会は担当理事である三上容司先生（横浜労災病院 整形）のもと大江（名戸ヶ谷病院 整形）、内山茂晴先生（信州大 整形）、清川兼輔先生（久留米大 形成）、楠瀬浩一先生（東京労災病院 整形）、田尻康人先生（都立広尾病院 整形）、西脇正夫先生（川崎市立病院 整形）からなる委員、アドバイザーである川端秀彦先生（大阪府立母子保健総合センター 整形）、小川正則公認会計士で学会の財務に関する業務を行い、事務局では中尾氏、本間氏が担当しています。財務委員会は東京都千代田区麹町のコングレ東京本社内の会議室で行い、対面で参加できない先生方にはwebでの参加をお願いしています。平成26年の第2回を昨年7月22日に、第3回を12月15日に開催しました。

委員会の業務は主に当該年度の予算執行状況の収支を点検すること、次年度予算編成、収入の柱となる会費納入について未納者の点検などを行うこと、新たな収益事業について提案を受けたり、発案することです。日手会の事業規模は年間約6500万円でそのうち収入は会費収入が4100万円、研修会などの事業収入が1200万円、審査料が1100万円などとなっています。支出は春、秋の教育研修会などの学術活動に1000万円、機関誌発行などの広報・出版費に2000万円、各委員会など会議費に800万円、専門医認定に600万円、事務委託費1000万円を含む管理・事務費に2000万円となっています。ここ数年で年ごとの収支が大きく変動することはありませんでしたが、広報・出版などのデジタル化、インターネット対応などの分野で多少の増減があります。

これを言い換えると現在の事業規模で行える範囲はほぼ固定されていることになり、大規模な新規事業を行うには、新たな収益事業を立ち上げるか、会費収入を増加させるかしかないと考えます。パナー広告などいくつかの収益事業の提案はありますが、今のところ大きな流れにはなっていません。日手会の事業範囲を現状のままとするか否かは理事会や会員の先生方の事業と会費との関係に関する考えかた次第とも言えると思います。財務委員会としては、新理事会の方針を見守りつつ、健全で正確な業務に努めてまいりたいと考えています。今後ともよろしくお願ひします。

教育研修委員会

委員長 服部 泰典

平成26年度教育研修委員会の構成メンバーは、担当理事：柏克彦、アドバイザー：青木光広、委員：澤泉卓哉、田中克己、大井宏之、射場浩介、小島康宣、建部将広、鳥谷部荘八の各先生方と委員長：服部泰典でした。

当委員会の主たる活動内容は春期ならびに秋期教育研修会の運営です。第20回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第57回学術集会の翌日の4月19日(土)に沖縄コンベンションセンターにて開催しました。参加人数は194名で7題の講演を企画しました。第20回秋期教育研修会は、8月30日(土)～8月31日(日)に開催しました。会場は大阪のナレッジキャピタルコングレコンベンションセンターを使わせていただき、久光製薬株式会社の協力を仰ぎました。参加人数は163名で9題の講演と症例検討会を企画しました。いずれの研修会も盛況で、実り多い研修会であったと自負しています。両研修会の講師の先生方、ありがとうございました。この場を借りて心から御礼申し上げます。平成27年度は、第21回春期研修会を第58回学術集会の翌日の4月18日(土)に東京で、第21回秋期研修会を8月29日(土)～8月30日(日)に奈良で開催する予定です。

また、教育研修会に加えて“第2回日手会カダバーワークショップ”を9月20日(土)～9月21日(日)に札幌医科大学整形外科学講座と解剖学第2講座と共催し、札幌医科大学にて行ないました。関節鏡コース9名、皮弁コース28名の参加者に対し、教育研修委員会委員を中心とする12名の講師が指導を行ないました。Thiel法という特殊な保存方法で処理されたカダバーは柔らかく、実際の手術に近い感覚で手術手技を行うことができました。関節鏡ではほとんど生体と同様な状態での手技の実践が可能でした。皮弁コースでは、血管内に注入したマイクロフィルにより皮弁の穿通枝も確認でき、四肢の多くの皮弁の挙上が可能でした。アンケート調査では、97%の受講者が有益なワークショップと回答し、100%が再度参加したいとの回答が得られました。平成28年には第3回のワークショップを計画しており、さらに魅力的な企画にしたいと鋭意準備中であります。

また、研修方法のあり方としては、第17回春期教育研修会からWeb研修会としてHP上での視聴が可能となっております。Web上の研修は参加できなかった方や遠隔地の方にとってはたいへん利便性の高いもので、自己研鑽の上でもたいへん有意義なものと考えております。また、新しい専門医制度においてはe-learningなどを活用した研修の場も必要になってくると考えられます。より良い研修システムの構築に向けて会員の先生方のご意見を反映できるように努めてまいりますので、今後ともご支援を宜しくお願い申し上げます。

編集委員会

委員長 正 富 隆

編集委員会は坪川直人担当理事以下、総勢22名の大所帯委員会である(紙面の関係で全員をご紹介できない事をご了承いただきたい)。「学術集会発表論文は原則的に採用」すべく、それぞれのレベ

ルの投稿論文を各編十数編ずつ何度もreviseを重ねる献身的な査読作業を必要とするからであり、編集委員にはこの場を借りて深謝したい。編集委員の査読前には代議員の方々による一般査読の完了が必須である。代議員のご負担は重々理解しているが、年間多くても3編なので、学会への貢献と雑誌の滞りない発刊のため速やかなる査読完了を昨年同様、ここに重ねてお願いする次第である。

当委員会は年1回の定例委員会を学術集会時に開催し、その後適宜メールによる意見交換を図りながらオンラインジャーナル「日本手外科学会雑誌」の査読・編集・発刊作業を担っている。今年度も第31巻を発行中であり、平成27年1月末日時点で第4号まで順調に公開されている。

オンライン投稿・査読システムやオンラインジャーナルの改良が喫緊の課題であることは言うまでもないが、それにかかるコストを容易に拠出できない学会の事情は会員にもご理解いただけたと思う。今年度・来年度の2年間で現行システムの再評価を行い、学会理事で構成される情報システム委員会で学会全体のITシステムの1つとしてそれらの改良について検討予定であるので、それまで多くのご意見をいただければと思う。

昨年は試みとして学術集会のシンポ・パネルより寄稿を募りオンラインジャーナルに掲載したが、今年度より総説や寄稿論文などは別冊への掲載となり、本誌は学術集会発表論文と自由投稿原著論文のみの掲載に特化されることとなった。また国際医学雑誌編集者会議(ICMJE)が2013年に提起した新たな「医学雑誌への執筆・投稿、編集における推奨」をもとに、日本医学会から「日本医学会医学雑誌編集ガイドライン(案)」が提示され、当誌もこれらに準拠していくことは時代の趨勢であり、当委員会としても当誌の投稿規定再検討・改訂の必要性を痛感しているところである。とくに「COIの開示」については規定内に早急に掲げる必要がある。COI委員会とも相談しながら、来年度の学術集会発表論文投稿募集時には整備すべく目下検討中である。来年度の投稿時には、改めて投稿規定をご確認頂きたい。

機能評価委員会

委員長 中村俊康

機能評価委員会は稲垣克記理事のもと、中村俊康、織田崇、長谷川健二郎、佐藤彰博、山下優嗣、長田龍介の7名および大井宏之アドバイザーにより活発な委員会活動を行っています。平成26年度の委員会は日手会時に1回、それ以外に3回のWeb会議を行いました。現委員会の最大の目標は昨年に引き続き第5版(PDF版)の作製です。

1: 日手会機能評価表

平成25年8月に第4版(PDF)をHP上に掲載しました。第5版は患者立脚型評価や妥当性が検証された、すなわち英文論文としてpublishされた疾患特異的QOL評価を掲載することと、新たな測定法などを掲載するように作業を進めています。

2: 日手会報告

平成26年4月の沖縄での日手会で委員会報告を行いました。織田委員からはMHQの妥当性と信頼性について、山下委員からは握力測定方法と測定機器の選択について、佐藤委員からは可動域測定法について、大井アドバイザーからは第5版の方向性についての4つの報告を行いました。この内佐藤委員の報告は日手会誌にacceptされています。

3: MHQの信頼性と妥当性の検証

織田委員を中心に検証を行っていて、その結果については日手会時に報告しました。現在、英文論文を作成中です。

4: 手指再接着の日手会評価基準の妥当性検証

長谷川委員による調査方法を含めて検討が行われています。

5: 手指可動域測定法、握力測定法

ハンドセラピィ学会の機能評価委員会と協力し、日手会誌へ掲載が決まっています。さらに複数の計測器の比較検討を予定しています。

6: 指用角度計

1度刻みの角度計の必要性があり、試作品が完成しました。作成業者の選定中です。

国際委員会

委員長 和田卓郎

国際委員会は柴田実担当理事、副島修アドバイザー(福岡山王病院)のもと、面川庄平委員(奈良医科大学)、光嶋勲委員(東京大学)、佐藤和毅委員(慶応大学)、鈴木修身委員(JR広島総合病院)、田中利和委員(キッコーマン総合病院)、三浦俊樹委員(JR東京総合病院)、和田卓郎(北海道済生会小樽病院)の6名の委員から構成されます。今年度の活動の概要を報告します。

HKSSH、ASSH Travelling Fellowの選出

平成27年度のJSSH-HKSSH Travelling Fellowとして田中祥貴先生(清恵会病院大阪外傷センター)を、JSSH-ASSH Travelling Fellowとして吉田綾先生(取手北相馬保健医療センター)、西脇正夫先生(市立川崎病院)を選出しました。応募者は皆立派な業績をお持ちで甲乙つけがたく、審査にあたっては大変苦慮しました。今回涙を飲んだ先生方も、来年度再チャレンジしていただければと思います。

第6回日米合同手外科会議

2015年3月29日～4月1日、ハワイ、マウイ島、Hyatt Regencyホテルで“Unsolved Problems in Hand Surgery”をテーマに日米合同手外科会議が開催されます。2011年に予定されていた会議が震災のため中止になったのは記憶に新しいことと思います。オープニングには別府諸兄先生が“Tsunami Recovery Update”のタイトルで講演されます。午前中は演題発表、ワークショップが行われ、午後はリフレッシュメントになっています。ご家族でハワイを楽しんでいただければと思います。また、30日午後にはゴルフトーナメントが開催されますので、奮ってご参加ください。JSSH、ASSHメンバー間の親交がより深まることが期待されます。

Bunnel Fellow、HKSSH Fellow来日

平成27年4月16、17日に根本孝一会長のもとで開催される日本手外科学会学術集会には、Bunnel FellowとしてDr Tamara Rozental (Harvard Medical School) が、HKSSH FellowとしてDr Sara Tong (Tseung Kwan O Hospital) が来日されます。根本会長のご高配により、学術集会ではTravelling Fellow Sessionが設けられ、日本のフェローと共に発表をしていただきます。また、Dr Rozentalは東京の施設を、Dr Tongは東京と名古屋の施設を見学されます。ホストの先生にはどうぞよろしく願いいたします。

広報・渉外委員会

委員長 西 浦 康 正

平成26年度の広報・渉外委員会は、島田幸造担当理事、勝見泰和アドバイザー、麻田義之・垣淵正男・草野望・千馬誠悦・日高典昭 各委員、小生の8名で活動してきました。

日手会ニュースは、号外、第42号(+第43号)の日手会ニュースの発刊を行いました。昨年度に引き続き、生田義和先生に「ハンドギャラリー (生田コレクション)」を寄稿していただきました。毎回楽しいお話を書いていただきありがとうございました。また、昨年度に引き続き、手外科医のリスクマネジメントは、麻生邦一、堀内行雄、両先生に寄稿していただきました。日常診療で注意する点やご自身の経験を御教示いただきありがとうございました。

ホームページに関しましては、一般の方が、手外科専門医を受診しやすくするために、手外科専門医が診療している医療機関の詳細について、専門医に文書・メールで問い合わせ調査を行いました。医療機関名、電話番号、ホームページアドレスなどが入った専門医名簿の改訂版を本学会のホームページに近々、掲載する予定です。また、一般の方から手外科に関して、よくお問い合わせのある質問に対してQ&Aを作成し、ホームページに掲載を予定しています。これは、今後逐次追加していく予定です。ホームページは、時代の進行とともに、古くなってきており、改良すべき点があくつもあるのですが、新専門医制度に伴う変更の可能性があるため、マイナーチェンジのみの変更にとどめています。メジャーチェンジの時期が近づいていますので、しばしお待ちください。

新手術パンフレットとして、草野委員が中心となり、No.28 PIP関節脱臼骨折を作成、完成致しま

した。まもなく印刷されることと思います。手外科パンフレットは、新しいものの作成とともに、既存のもので内容が古くなったものがあり、今後は改訂作業も行っていく予定です。

今後とも、皆様のご理解とご指導の程、よろしくお願い致します。

社会保険等委員会

委員長 吉川 泰弘

平成26年度の社会保険等委員会は、新たに池上博泰担当理事のもと、牧野正晴委員、高瀬克己委員の両アドバイザー、稲田有史委員、坂野裕昭委員、戸部正博委員、平瀬雄一委員、根本充委員、清重佳朗委員、代田雅彦委員と私、吉川泰弘が委員長として、さらに佐々木孝元委員がオブザーバーとして計12名での活動を行ってきました。

◆外保連アンケート調査

次の外保連試案2016の掲載に向け、当委員会より外保連アンケートに本年2月に提出した要望項目は、技術新設6項目、技術改正2項目です。その内容は優先順位順に技術新設が1) 靭帯性腱鞘内注射、2) エコー下靭帯性腱鞘内注射、3) 掌・背側指趾神経ブロック、4) 骨折部傍骨膜神経ブロック、検査として5) 知覚再教育、6) 精密知覚機能検査で、技術改正が1)手術の通則14の留意事項で指に係る同一手術野における算定方法で「の中の指(手、足)」を削除、2) K047-2難治性骨折超音波治療法の適応拡大です。

◆新規要望項目について

2014年の要望項目とほぼ同様の内容と同じ順位ですが、新規の内容として技術改正のK047-2については、日手会プロジェクトで行われた舟状骨偽関節手術後の超音波治療結果の有用性に基づき、舟状骨偽関節手術後の超音波治療にも適応拡大する要望を急遽アンケート調査に組み入れました。また、今回は要望項目に入れることができなかったのですが、当委員会より要望してきた1%キシロカインポリアンブ(防腐剤無添加)の局所静脈内麻酔への使用が、昨年の厚労省のヒアリングを経て、上肢に限定して適応追加として承認される方向で動いています。

◆ランチョンセミナー

当委員会のもう一つの活動である学術集会ランチョンセミナーは、平成26年4月の第57回学術集会において牧野正晴先生による講演が行われ、多数の会員の先生方の出席と好評を得ることができました。次回も本年4月の第58回学術集会で牧野先生によるランチョンセミナーが予定されています。今後も会員の皆様に社会保険に関する有益な情報を提供できればと考えています。

医療費が毎年40兆円に膨れ上がる現在、さらに毎年1兆円ずつの増加傾向にある中、平成28年度保険診療報酬の改定はますます厳しくなることが見込まれます。そのような状況の中でも会員の皆様のご協力をいただきながら、手外科学会からさらに有益な改定を進めていきたいと考えております。今後も手外科学会会員の皆様のご理解とご支援をどうぞよろしくお願い致します。

先天異常委員会

委員長 射場 浩介

今年度の先天異常委員会は、柏克彦担当理事、堀井恵美子アドバイザー、石垣大介委員、黒川正人委員、沢辺一馬委員、鳥谷部莊八委員、中島祐子委員、と私の8人で活動してまいりました。本委員会の主な活動内容は、手の先天異常懇話会の開催、日本手外科学会先天異常分類マニュアル英語版の作成、裂手症関連症例の登録終了と資料解析、手の先天異常症例相談窓口の開設、「代表的な手外科疾患」パンフレットの「母指多指症」と「強剛母指」の修正版作成と「握り母指・斜指」に関する新しいパンフレットの作成などがあげられます。

日常の手外科診療の中で先天異常手を治療する機会は比較的少なく、また、治療を行う施設も限られていると考えます。私たちは、本委員会活動が多くの施設での先天異常手診療に少しでも役立つように、努力していきたいと考えます。

手の先天異常懇話会

金谷文則会長のご配慮により学術集会期間中の4月17日(木)にランチョンセミナーのプログラムとして取り入れて頂きました。今回は、浜松医科大学小児科教授 緒方勤先生より「裂手裂足症およびその関連疾患の発症機序」、国立成育医療研究センター整形外科 高山真一郎先生より「裂手症：日手会症例登録報告と治療上の問題点」の2つのご講演を頂き、症例検討も含めて講演会形式で行われました。懇話会では日手会、日整会、日形会の教育研修講演単位の取得が可能であり、参加者は179名でした。

手の先天異常分類マニュアル英語版の作成

手の先天異常分類マニュアル英語版の作成を行い、英文雑誌の“Hand Surgery”に掲載予定です。

手の先天異常症例の登録

症例登録は終了し、解析結果の一部は上記の「手の先天異常懇話会」で高山先生から報告されました。

手の先天異常症例相談窓口の開設

症例相談窓口はホームページ上にすでに開設されています。

「代表的な手外科疾患」のパンフレットの内容修正と新規作成

日手会ホームページに掲載されている「代表的な手外科疾患」パンフレットの「母指多指症」と「強剛母指」の修正版を作成しました。また、「握り母指」と「斜指」について新しく「先天性の手指変形」パンフレットとして原案を作成しました。現在は、パンフレット完成に向けて広報渉外委員会と検討を行っています。

今後とも皆様のご支援、ご指導の程よろしくお願い致します。

倫理・利益相反委員会

委員長 根本 充

当委員会は、渡邊健太郎担当理事、塚田敬義アドバイザー、砂川融アドバイザー、重富充則委員、普天間朝上委員、湯川昌広委員、深谷和子外部委員、山我美佳外部委員、委員長の私の9人体制で活動しております。主な活動は新規入会希望者の審査、利益相反自己申告書の審査、学術研究プロジェクト課題の倫理審査を行っております。

1. 入会審査

新規入会希望は毎月15名前後の方が申請されます。平成26年1月～12月までの入会希望者は170名で、審査の結果、全員承認として理事長に上申しました。

2. 利益相反に関する活動

利益相反自己申告書の審査

アドバイザー、外部委員の先生方にも参加していただき、利益相反自己申告書の審査を毎年行っております。審査の結果、疑義が生じた場合には疑義の確認を行い、利益相反が生じる場合には役職の変更を理事長に上申しました。

日本医学会分科会利益相反会議

平成26年11月28日に日本医師会大講堂で開催されました。国内外における利益相反の現状と動向が報告され、2月に改定された“医学研究のCOIマネジメントに関するガイドライン”の解説が行われました。

3. 学術研究プロジェクト課題の倫理審査

学術研究プロジェクトに採用された課題の倫理審査を行いました。本年度学術研究プロジェクトに採用された課題は1件のみでしたが、慎重な審査を行い承認として理事長に答申しました。

最後に、研究者は口演、論文発表の形式に関わらず研究成果発表の際には、利益相反状態の開示、公開が求められる時代になりました。また、論文発表代表者は全責任を負うことがガイドラインに明記されておりますので、ガイドラインに則った研究成果の発表をお願いします。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 磯貝典孝

構成

日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会の構成メンバーは、仲沢弘明担当理事、磯貝典孝委員長、小野浩史委員、亀井 讓委員、長岡正宏委員、中土幸男委員、内田 満委員です。

活動内容

1. 平成26年度学術研究プロジェクトの選考

平成26年11月12日ステーションコンファレンス東京にて、平成26年度学術研究プロジェクト選考委員会を開催し、平成26年度の日本手外科学会学術プロジェクトの選考を行いました。1名の応募があり、大阪市立大学 整形外科 岡田充弘先生の「インドシアニンググリーン動画解析システムを用いた末梢神経内血流評価と臨床応用」が手外科分野の高いエビデンスが得られる臨床研究(自由テーマ)として選ばれ、理事会で承認されました。

2. 学術研究プロジェクト進捗状況報告書のチェック

日本手外科学会学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年プロジェクト研究の進捗状況を報告し、プロジェクト終了から1年以内に、プロジェクトの結果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ、日手会雑誌もしくはHand Surgeryで公表することが義務づけられています。尚、日手会雑誌には、自由投稿論文として発表していただくようお願いしております。研究者からの報告書を委員で分担し、研究の進捗状況、助成金の使途、学会報告、論文報告をチェックしております。進捗状況報告書の未提出、学会未発表、論文未掲載に関しては、研究者の氏名を公表し、当分の間、プロジェクト提出医療機関、施設からのプロジェクトを受け付けられないなどのペナルティーも検討しておりますのでご注意ください。

3. 日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会主導の研究テーマ

平成25年度より、個人からご提案いただくプロジェクトのみならず、学術研究プロジェクト委員会が研究テーマを提示して、そのテーマに沿った研究プロジェクトの募集が理事会で承認されました。平成26年度プロジェクト委員会主導の研究テーマは、「母指CM関節症に対する治療」となりましたが、本研究テーマへの応募はありませんでした。

今後とも、学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの実施を目指し努力いたします。皆様のご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

専門医制度委員会

委員長 田中克己

委員会構成

本委員会は専門医制度を統括する目的で、他の各種委員会との連携のもとに活動を行っています。

平成26年度のメンバーは稲垣克記担当理事、土井一輝アドバイザー、岩崎倫政委員、亀井謙委員、柴田実委員、鈴木茂彦委員、砂川融委員、牧裕委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と委員長の田中克己です。矢島理事長みずから来るべき新しい専門医制度に向けての制度設計を中心にならびに活動しております。

活動内容と今後の方針

2014年5月にこれまでの社団法人日本専門医制評価・認定機構に代わり、一般社団法人日本専門医機構が設立されました。また、7月には専門医制度整備指針(第1版)も公表されました。今回の専門医制度改革の中で、その柱組みとしての19基本診療域の専門医資格の取得と、その後のサブスペシャリティ領域専門医の取得に向けての専門医としての医師像が明確に要求されています。

現在、日本専門医機構において、日本整形外科学会ならびに日本形成外科学会の専門研修プログラムの認定作業が進んでいるところです。その後、確定・公表され、2017年度からは新しい制度における基本診療域の研修が開始することになります。その後、基本診療域の専門医認定が行われるのと同時に日本手外科学会の専門医研修が開始されますので、実際には2021年度の研修プログラム開始の予定です。

日本手外科学会の専門医プログラムはあくまでも基盤学会である両学会の専門研修プログラムの公表の後にその内容と歩調を合わせる形で作業を進めて行く必要があります。

今後の予定としては、1. 日本手外科学会認定研修施設(基幹研修施設)への専門医制度へのアンケート結果の広報(施設・ホームページ上など)、2. 新体制専門医機構に基づいた指針を基盤にした手外科専門医制度・研修プログラムの構築、3. 指導医の定義と指導医、専攻医のマニュアル、評価体制の作成等を行う予定です。なかでも、日本手外科学会専門医制度のプログラムをどのような病院群で学閥を超えてグループ化を行うか、日整会ならびに日形会におけるカリキュラムで短縮可能な研修期間も含め整形外科と形成外科が共に研修できるように、母体学会と連動しながらカリキュラム委員会、情報システム委員会、施設認定委員会と共に審議を進めてまいります。

手外科学会の専門医制度はより高い専門性をもって良質の医療を国民に提供できるためのものですが、時代の要求にも応えなければなりません。しかし、その内容は手外科医自身にとっても、手外科を目指す若い医師にとっても無理なく認容される必要があります。今後数年が新しい制度にむけての変革の時期となります。会員諸氏のさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

専門医資格認定委員会

委員長 中道 健一

平成26年度の専門医資格認定委員会(敬称略)は、鈴木 茂彦担当理事、大泉 尚美、大谷 和裕、鳥山和宏、中尾 悦宏、村松 慶一委員、および私で専門医新規申請、更新申請書類の審査と相談医の推薦を行いました。

第7回手外科専門医試験受験資格認定申請については、40名から申請書類の提出がありました。事前審査をへて平成26年12月17日のweb会議と平成27年1月17日の委員会での審査の結果、書類審査合格38名、書類審査不合格2名としました。

2015年度専門医更新申請については、38名から申請書類の提出がありました。事前審査をもとに上記会議と委員会での審議の末、更新認定34名、再認定希望者1名、海外留学中1名、猶予希望者1名、昨年猶

予取得者1名としました。

また、相談医として9名の先生を推薦しました。

このほか、専門医制度細則の変更に対し新規あるいは更新資格の有無について様々なお問い合わせがあり、これらについても対応しました。

最後になりましたが、事務局の皆さまには大変お世話になっております。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 石川浩三

平成26年度の施設認定委員会は、川端秀彦担当理事が任期満了につき坪川直人理事に交代しました。委員長は石川浩三が継続担当し、委員は、尼子雅敏、江尻荘一、島田賢一、坂井健介、藤尾圭司で合計7名のメンバーです。

主な活動内容は、施設認定作業とそれに伴う判定基準の検討です。昨年度に、申請時期を見直し、更新申請時期は9月から11月にまとめる事として、ホームページに掲載しました。これに伴い、認定作業は12月に行い、1月の理事会で承認を得る段取りとしています(1月が年度末となるため)。

認定作業は新規申請についても行っていますが、申請に関してご留意頂きたい点があります。施設認定要件(細則参照)の中の必須項目をご存じないのかこれを満たしていない申請書が散見されます。要件には、手術件数が充足されていること、手外科に関する学習会・症例検討会を有していること、研修カリキュラムに基づくあるいは準じた研修ができることすなわち研修プログラムがあること、医療安全に関する管理委員会を有していることとなっています。そこで今年度から、申請様式(様式4-2)の中に、これら4項目の必須要件には星印(★)を付けております。この点を、申請時には確認してください。

今年度の申請数は、更新審査が48件(基幹研修施設40件認定、関連研修施設8件認定)、新規審査が27件(基幹研修施設18件認定、関連研修施設9件認定)、認定を取り消した施設が8件でした。

新規審査に伴う問題点として多いのは、専門医の在籍期間に関するものです。専門医取得して在籍1年経過すれば、その施設で申請は可能です。ただしその施設が認定要件を満たすことが条件です。異動特例で、専門医が赴任した施設においても同様です。ただし前在籍施設が認定施設であったことが条件になります。専門医の留学後についても異動特例と同じ考え方です。FAQにも昨年追加しております。繰り返しになりますが、申請の際には定款施行細則第6号専門医制度細則第20条の認定施設基準をよくご確認ください。とくに必須項目がクリアできていない申請がありますのでご注意ください。

書類が多くて面倒とのご指摘も頂いておりますが、日本手外科学会専門医制度の充実のためにご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

1) メンバー紹介

平成26年度のメンバーは、担当理事 仲沢弘明先生、アドバイザー 清水弘之先生、委員 新井 健先生、有野浩司先生、池田全良先生、加藤博之先生、國吉一樹先生、酒井昭典先生、佐野和史先生、武石明精先生、長谷川健二郎先生、福本恵三先生、委員長 鈴木克侍です。問題作成と口答試問における人員不足を解消するために、委員を1名増員して頂きました。下線の4名が入れ代わったメンバーです。いずれも教育現場の経験豊富な先生で試験問題作成に習熟されています。

2) 活動1: 過去問1年分の公開と第6回専門医試験結果の検討

受験者より要望の多かった過去問1年分を全問ホームページに公開(2013年10月)して始めてむかえた第6回専門医試験は合格率92%という好成績でありました。合格率が90%を超えるのは第1回専門医試験以来のことであり、ホームページでの問題公開が受験者の試験対策に有効であったことが実証されました。第7回試験問題の製作にあたっては、問題の難易度が易しくなりすぎないように、そして資格試験にふさわしい問題を出題できるように検討を重ねています。

公開問題の閲覧はホームページの『医療関係者の皆様』より入り、『2013.10.11. 日手会専門医試験1年度分を公開』を御覧下さい。そのなかの『PDF資料1~3』もぜひ御覧下さい。

- ①筆答試験44問(88点)と口答試験2問(12点)で100点満点であること
 - ②合格の目安が60点であること
 - ③筆答試験の設問文に対する解答方法が詳述してあること
 - ④口答問題は委員会用意問題(8点)と受験者提出症例問題(4点)の2問であること
 - ⑤委員会用意口答問題は4症例有りそのなかから受験者が試問を受けたい1題を選択する方式であること
- など受験者が準備しやすい情報が満載されています。

3) 活動2: 第7回専門医試験問題作成

専門医試験委員会は資格試験にふさわしい良問を作成すべく、年に6回の委員会を開催しています。今年度は10月12日の第3回委員会で筆答問題44題と口答問題4題を完成させることができました。2月1日の委員会で、本番同様の問題用紙、解答用紙、採点用紙で筆答問題と口答問題を最終チェックします。また、受験者と口答試問者の所属が一致しないように調整するなどの作業を行います。

4) 活動3: 第7回専門医試験開催

平成26年度の第7回専門医試験は昨年度と同様に平成27年3月21日(春分の日)に東京駅のステーションコンファレンス東京で開催されます。午前中に筆答試験(70分)、休憩をはさんで午前から午後にかけて口答試験が行われます。午後2時には最後の口答試験が終了する予定です。今回は書類審査

を合格して専門医試験を受験する人数が38名ですので、委員会メンバー13名と事務局員で対応できません。受験者が多いときには東京地区の代議員に口答試問担当をお願いすることがございます。その節は御参加、御協力を宜しくお願い申し上げます。

以上、専門医試験委員会メンバーは会員の皆様が納得できる試験問題を作成し、試験を開催すべく尽力いたしております。しかし、マンパワーが不足しているところもございます。会員の諸先生方の御助力が必要なおときにはお願いに上がりますので、お力添えを宜しくお願い申し上げます。

カリキュラム委員会

委員長 長田 伝重

1. 構成員

カリキュラム委員会は平成26年4月に構成員の変更があり、牧 裕担当理事、松下和彦委員長が退任され、岩崎倫政新担当理事、松下和彦新アドバイザー、柿木良介新委員のほか内田 満委員、松村 一委員、沢辺一馬委員、森友寿夫委員、長田伝重新委員長の計8名となりました。

2. 活動内容

委員会活動は主にweb会議で行っています。

教育研修講演申請の審査

本委員会の主な活動で、毎月審査を行っています。平成26年2月から平成27年1月までの申請件数は296件で、認定288件、非認定8件でした。非認定の理由は、①講演の内容が、肩関節疾患など研修カリキュラムに含まれていない疾患を対象としたものが6件、②申請期間を過ぎていたものが2件でした。また、申請期間と期限切れ後の申請について再度委員会で検討した結果、従来の規程通りに申請期間は3カ月前まで、期限切れ後の申請は基本的に非認定としました。教育研修講演申請を行う場合には期間に余裕を持った申請をお願いいたします。

e-learning作成

日本整形外科学会から、整形外科専門医研修プログラムのカリキュラム、ランクC(全員の専攻医が平等に経験することはかなり難しいと判断される疾患)に対してホームページ上で閲覧学習し、簡単なセルフチェックも行えるようにする目的でe-learningの作成依頼が日手会にあり、理事長のご指示にて当委員会が担当することになりました。手外科領域のe-learningとして手のスポーツ外傷[スキーヤー母指、野球指、ラガージャージ損傷など]、手の拘縮と変形[Volkman拘縮、複合性局所疼痛症候群、Dupuytren 拘縮など]、石灰性腱炎、手の骨壊死[Kienböck病、Preiser病など]、Guyon管症候群の各疾患を担当理事以下7名で分担して現在作成中です。作成後は理事会に上申の予定です。

情報システム委員会

委員長 西 浦 康 正

平成26年度の情報システム委員会は、担当理事：池上博泰、委員：稲垣克記、岩崎倫政、落合直之、垣淵正男、柏克彦、勝見泰和、柴田実、島田幸造、坪川直人、仲沢弘明、三上容司、矢島弘嗣、渡邊健太郎、委員長：西浦康正で委員会を開き、日本手外科学会の情報システムについて審議しました。

日本整形外科学会(以下、日整会)、日本形成外科学会(以下、日形会)のシステム及び関連事項の現状を報告しあい、日手会として各学会との連携について検討しました。

日整会の情報システムは、①現在、事務局側が「サンユ社」の会員管理システム、オンライン側が京葉コンピュータサービス(株)(以下、KCS)のシステムを利用している。現在構築されているシステムは、論文管理、研究会管理、オンライン管理、専門医取得単位閲覧システム、会員データベース、認証基盤、決済基盤などである、②新専門医制度に対応する専門医管理システムを構築するにあたり、ベンダー選定作業が進行中であり、それによって、今後全体のシステム構成が決定される予定である、③ICカードを用いたオンラインシステムが稼働し、教育研修講演の参加単位の登録、学術集会参加受付などは既にデジタル化されている。また、三菱UFJの無料のカードと提携することにより、年会費・学術集会参加などのオンライン決済が行われている、④関連学会と連携するために、今後は医籍登録番号をID番号とすることが決定していることが報告されました。

日形会ではこのようなシステムはないが、各施設ごとにCD-Rを事務局に年に1回送り、症例登録を行っていることが報告されました。

オンラインジャーナルHand Nowの発刊準備状況について報告されました。KCSから、日手会システムの現状と今後の提案、スポンサー収入について報告があり、討論を行いました。

日手会は、今後、単位管理、症例登録のデジタル化を進める必要があります。新しい専門医制度が始まることから、基盤学会である日整会、日形会との連携が必須であり、また、全体のシステムを見直すことも視野に入れなければなりません。全体のシステムとしては、日整会会員が多いため、日整会のシステムが決まってからそれと連携したシステムとし、日形会ともそれに準じて連携していくのがよいであろうという結論になりました。使い勝手のよいシステムとなりますよう、努めてまいりますので、皆様の御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

用語委員会

委員長 田 中 英 城

本委員会は特別(臨時)委員会で、渡邊健太郎理事を中心に浦部忠久、根本充、後藤渉、牧信哉そして田中の6名で活動しています。

1990年5月に「手の外科用語集」が発行され、その後4回の改訂を経て、2012年4月には現行の「手外科用語集改訂第4版」となっています。

2014年11月には「手外科用語集改訂第4版」のPDF化したものを学会のホームページの会員専用ペー

ジに掲載いたしました。各自でダウンロードしていただき、使用する検索ソフトの基本機能で用語検索も出来るようになっていきます。

さらに本委員会では改訂第5版を作成中で、これには新用語を加え内容の充実をはかることいたしました。追加する用語については2012年から委員会で検討をはじめ、Green's Operative Hand Surgery 6th ed.の索引用語から抽出した88語をその候補に挙げました。これらの用語に関しては2014年夏に代議員の皆様へ直接メールを差し上げて意見公募を実施いたしました。返答率は全代議員248名中24名と残念ながら予想をかなり下回りましたが、的確な指摘から単純な間違いの指摘まで貴重な意見をいただきました。委員会としては十分検討を重ねてからお伺いしたのですが、やはり多くの方々から見ていただく事の必要性を改めて実感した次第です。ご協力誠にありがとうございました。

現在、新用語を組み込み、整合性のチェック、記号の修正などを行っているところです。

今後は冊子版の発行は行わない事、同時に用語集のデジタル化も本学会の方針です。デジタル化の具体的な形についてはこれまでの委員会でも長年議論、検討されてきました。現委員会では用語集の作成および運用経費を最小限に抑えつつ、もちろん著作権の問題も無い形で全会員に提供出来るように進めており、完成は最終段階を迎えています。

手外科用語集のデジタル版が完成いたしましたら、次は日本医学会医学用語辞典への統合手続きの検討に入ります。

Web 登録委員会

委員長 牧野正晴

平成23年(2011年)1月発足したWeb登録委員会は「日本手外科学会 専門医資格・更新システム」の開発を行ってきた。

平成26年(2014年)5月7日それまでの日本専門医制評価・認定機構の発展的解消組織として社団法人 日本専門医機構が発足し、同年7月に専門医制度整備指針(第1版)が発表された。新しい専門医制度に相乗りしようとする学会はこれを基に制度を整備し、機構の認定を受けることが必須とされている。日本手外科学会は18学会(総合診療専門医を含めれば19学会)ある基本領域専門医の2階建て構造の2階部分である29のSubspecialty領域専門医として位置づけられている。新Subspecialty専門医制度研修開始は、2017年に開始される基本領域専門医研修開始から4年経過し、基本領域専門医資格習得者がSubspecialty専門医資格研修を開始する2021年に始めることが予定されている。

日本手外科学会としてはそれまでに専門医制度整備を終了し(具体的には2020年度中に)、カリキュラムおよびプログラムを公開して2021年の研修希望者とのマッチングに備える必要がある。

現在は基本領域学会が専門医機構の認定を受ける準備をしている段階である。Subspecialty学会ではその基本領域専門医制度を踏まえた活動が要求されるため、Web登録委員会活動は休止状態である。しかし、専門医制度の情報管理・運営に関し、日本専門医機構は情報を紙媒体ではなく電子媒体で登録、管理することを推奨しているため、本委員会の活動再開がいずれ必要になると考えられる。

定款等検討委員会

担当理事 島田幸造

定款等検討委員会は特別委員会であり、必要時に設置され召集される委員会です。本年度は矢島理事長により召集され、担当理事を含めて委員5名で活動しております。

本年度の日本手外科学会役員は昨年の社員総会における選挙によって選出されたわけですが、その際の選出方法について議事が紛糾し、長時間におよんだことは代議員の皆さんの記憶に新しいことと思います。会員諸氏、代議員全員がこの学会をより良いものにしていこうという熱意があつた「熱い討議」を生んだものと思われませんが、一方、これまでその選出方法にあいまいな点が多く、会員間でのコンセンサスが得られていないことも明らかとなりました。

当委員会では日本手外科学会が日本整形外科学会、日本形成外科学会の2基盤分野の上に立つサブスペシャリティという位置づけであることを大前提に、日本手外科学会の新専門医制度を確固たるものにするべく定款の見直しを検討しております。その最初の命題が前述の役員選出規定の明確化です。今年度の本委員会では役員選出規定細則を見直すことから討議を始め原案等を作成しましたが、学会顧問弁護士の方の宗像先生からの御助言もあり、細則よりも定款でその規定をより明確に定めるよう議論を行っています。

各分野、各地域、会員全体からバランスよく意見を集約するためにも役員選出規定は重要です。今回の理事会での討議を経て社員総会に提出できるよう、その改定案に関して現在審議を重ねています。会員の皆様全ての賛意を得られるものを作るのは容易なことではありませんが、本学会がより良いものになっていくことを目指して本年度も引き続き活動していく予定です。

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会

委員長 安部幸雄

澤泉卓哉委員長をはじめとした橈骨遠位端骨折のエキスパートの先生方により、2008年までの数多くの論文をベースとして作成され、2012年に上梓された橈骨遠位端骨折治療ガイドライン第一版は珠玉の治療ガイドラインとして輝きを放ち続けてきました。一方、昨今の医学、医療の進歩はとてつもなく早く、それは手外科の分野においても例外ではありません。橈骨遠位端骨折の分野においても、社会変化（高齢化、早期社会復帰への要請等）による手術適応の変化、CT、MRI、超音波機器を使用した診断、治療への応用、鏡視下手術の応用と発展、様々な種類の内固定材料の開発と臨床応用、内固定術の普及に伴う種々の合併症の発覚、後療法早期化などに加え、エビデンスレベルの高い論文が次第に発表されるにつれ、ガイドラインの修正を余儀なくされました。

2014年4月、沖縄で行われました日手会において第1回の委員会を開催して以降、現在まで渡邊健太郎担当理事のもと私のほか文末の11名の委員と2名のアドバイザーで計6回の委員会を行っています。現在までの進行状況は1) 今回のガイドライン改定に費やす予算の確保と提携業者の決定、2) 橈骨遠位端骨折の治療に関する2009年以降に発表された計2100編を超える文献の中から一時選択により

1800編あまりの論文を採択し、PDFを入手、3) 前回のガイドラインを踏まえたクリニカルクエスチョンの検討、決定、4) 構造化抄録作成に向けての検討、を行ってまいりました。特に4) 構造化抄録に関しましては、前回のガイドライン作成の際に、評議員、理事の方々への十分なご理解が得られないまま作業を進行されたとの経緯から、本年4月の日手会定時総会において、構造化抄録作成に関する協力をご依頼させていただく予定です。特に今回はエビデンスの質を評価するMINDS 2014に則りバイアスリスクなどの幾分複雑な評価が必要となります。何分、たくさんの文献のため委員会メンバーのみでは対処できませんので何卒、ご協力のほどお願い申し上げます。さらに構造化抄録作成後は、各文献のエビデンスレベルの決定からガイドライン本文の作成、パブリックコメントを頂き2016年5月ごろに最終段階を行いその後の刊行を予定しております。皆様方には今回のガイドライン作成に際して多々ご迷惑をお掛けすることと存じます。また不備、ご不満等をご指摘いただきより良いガイドラインを作成していく所存であります。何卒、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

担当理事: 渡邊 健太郎

委員長: 安部 幸雄

委員: 泉山 公、今谷 潤也、金城 養典、児玉 成人、長尾 聡哉、仲西 康顕、藤原 浩芳、三浦 俊樹、森谷 浩治、門馬 秀介、川崎 恵吉 (留学中)

アドバイザー: 金谷 文則、澤泉 卓哉

オンラインジャーナル別冊運用委員会

委員長 平 田 仁

2012年に始まった日本手外科学会誌のオンラインジャーナル化は会員の利便性を高めたのみならず、学会の財務負担を軽減することとなり、多難ではあったが、非常に有意義な改革であった。オンラインジャーナル化にはJ-Stageのような公共インフラを用いる方法もあったが、編集委員会と理事会において慎重に検討を重ね、初期投資をしてでも独自システムを構築する道を選んだ。審議の過程で最も強く意識されたことは雑誌購読という会員の特権を維持することであったが、併せて従来雑誌に科せられてきた収益事業としての側面も強く意識された。学会にとって原著論文を取り扱うジャーナルの発行は支出負担の大きな事業であり、広告収入により財務負担を少しでも緩和する道は残しておきたいと考えたのである。しかし、日本の経済情勢の悪化もあり学会員のみを対象とするジャーナルへの広告募集は年を追う毎に厳しさを増しており、オンライン化されたジャーナルへ広告掲載を希望する企業はほとんど皆無となっていた。そこで、会員のみを対象とするジャーナルとは別に、医師全般を対象に手外科に関する最新情報を発信するオンラインマガジンを独自に発行し、社会貢献活動を通じて収益を得るというアイデアが生まれた。沖縄県那覇市で開催された第57回日本手外科学会の代議員会において編集委員会がこの趣旨に基づくオンラインマガジン発行を提案し承認されたことを受け、矢島理事長の指示により事業の具体化を目的に坪川担当理事、岩崎委員、酒井委員、牧委員、そして私の4名により構成される別冊運用委員会が新設され、私が委員長に任命された。

これまでに4回の委員会を開催し、マガジンの編集方針や利益相反の回避に関し議論を重ねてきた。その結果、京葉コンピューターサービスと三菱商事株式会社により運用されている“e学会”に新設されるサイエンスマガジンのコーナーを受託し、国内医師向けに明確な科学的根拠に基づく最新の医療情報を提供するコラムを運用する方向が示され、本年1月12日の理事会で承認された。この方式の最大の利点は学会が直接企業と交渉して広告募集をする必要がなくなることであり、これにより利益相反の問題が回避できる点が顧問弁護士からも評価された。来年度の発刊を目指し現在16名のjunior editorの選考を進めているところである。

日本手外科学会学術集会等のお知らせ

◆第58回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成27年4月16日(木)～17日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：根本 孝一(防衛医科大学校 整形外科)
詳 細：<http://www.jssh2015.umin.jp>

.....

◆第21回春期教育研修会◆

会 期：平成27年4月18日(土)
会 場：京王プラザホテル コンコルドボールルームB
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse>

.....

◆第21回秋期教育研修会◆

会 期：平成27年8月29日(土)～30日(月)
会 場：東大寺文化センター
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse>

関連学会・研究会のお知らせ

◆第58回日本形成外科学会学術集会◆

会 期：平成27年4月8日(水)～10日(金)
会 場：ウェスティン都ホテル京都
会 長：鈴木 茂彦(京都大学大学院医学研究科・医学部形成外科学 教授)

.....

◆第29回日本医学会総会 2015関西◆

会 期：平成27年4月11日(土)～13日(月)
会 場：国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都、京都大学百周年時計台記念館、
京都大学医学部芝蘭会館
会 頭：井村 裕夫(京都大学名誉教授・元京都大学総長)
詳 細：<http://isoukai2015.jp/>

.....

◆第88回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成27年5月21日(木)～24日(日)
会 場：神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場
会 長：吉川 秀樹(大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学整形外科教授)
詳 細：<http://www.joa2015.jp>

.....

◆第28回日本臨床整形外科学会学術集会 維新学会・山口◆

会 期：平成27年7月19日(日)～20日(月・祝)
会 場：海峡メッセ下関・下関市生涯学習プラザ
会 頭：丘 茂樹(丘病院 院長)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/28jcoa/>

.....

◆第26回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成27年9月18日(金)～19日(土)
会 場：ホテル プエナビスタ(JR松本駅より徒歩7分)
〒390-0814 長野県松本市本庄1-2-1
会 長：加藤 博之(信州大学医学部整形外科学教室 教授)
詳 細：<http://www.jpns26.com/>

※演題登録期間は、2015年2月19日(木)～2015年4月30日(木)までとなっております。

学術集会ホームページよりご登録ください。

主催事務局：信州大学医学部整形外科学教室

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

TEL：0263-37-2659 FAX：0263-35-8844

.....

◆第24回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成27年10月8日(木)～9日(金)
会 場：岩手県民会館
会 長：小林 誠一郎(岩手医科大学医学部形成外科 教授)
詳 細：<http://jsprs24.umin.jp/>

.....

◆第30回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成27年10月22日(木)～23日(金)
会 場：富山国際会議場ほか
会 長：木村 友厚(富山大学大学院医学薬学研究部整形外科・運動器病学 教授)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/joakiso2015/>

.....

◆「外保連ニュース第23号」発行のお知らせ◆

外保連ニュースが発行されました。
詳細は下記URLをご参照下さい。
詳 細：<http://www.gaihoren.jp/gaihoren/index.html>

編集後記

春の訪れが近づく中、日手会ニュースの第43号をお届けいたします。本号では、2014年度JSSH-ASSH Traveling Fellowの報告が掲載されています。浜田先生と池口先生から訪問先の様子が臨場感たっぷりに記されており、今後留学を考えられている先生方にとっても大いに参考になるものと思います。この制度は平成12年度から始まっており、過去のFellowの名簿は日手会のホームページで参照することができます。いずれも、日手会の中核を担う高名な先生方ばかりであり、浜田先生と池口先生も、今回の訪問で得た知識や人脈を十分に活用して、より一層ご活躍されることを期待いたします。

生田先生のハンドギャラリーの今回のテーマは「モナリザの手」です。思い起こせば、数年前にベストセラーになった「ダビンチコード」でも、フィボナッチ数列や黄金比は暗号(コード)の謎を解く重要な鍵として使われていました。この小説については、フィクションでありながら、作者が「事実に基づいている」と述べたために内容の真偽のほどに物議を醸したようですが、中手骨と3つの指節骨の長さをはじめ、人体のあらゆる部分が黄金比に従うことは疑いのない事実のようで、その神秘性には驚くばかりです。

今回は「手外科医のリスクマネジメント」は休載です。次号から再開いたします。

さて、日手会学術集会の開催が目前に迫ってまいりました。今年も、白熱した議論が繰り広げられることを楽しみにしたいと思います。

(文責：日高典昭)

広報・渉外委員会

(担当理事：島田幸造, アドバイザー：勝見泰和,

委員：麻田義之, 垣淵正男, 草野 望, 千馬誠悦, 西浦康正, 日高典昭)